

郎・田中亮, 臺灣博物館協會出版, 頁 1-65, 圖版 I-XIII, 昭和 16 年 (1941) 7 月, 臺北帝大理農動物 (比較形態學哺乳動物學)

寫生圖が追々出来るにつれて, 是れらを如何なる形のものとして世に問ふ可きかといふ事が筆者の大きな迷ひであつた。此の迷ひを解いて呉れたのが畫家の重病と, 開學記念講演の受諾と, 友人のすゝめとであつた。かゝる機會がなかつたなれば, 今日も尙かつ迷ひの中に低迷して居たのかも知れない。圖説は圖版とその説明——即ち記載——をもつて主體とする事は言ふ迄もない。従つて種名に関する論議に對しては中間過程はすべて省略せられて居るが, 前記三編の骨髓は明確に顯現せられて居るつもりである。圖版は四色オフセット片面アート刷り十三葉で, 臺灣産として知られた十三通りの鼠が一種宛納められて居る。本島産としては紅頭嶼の一種だけもれて居るが他は凡網羅せられて居ると考へると, 本島には少なくとも十四種の鼠が居ると言つていい。原畫は或は動物に, 或は植物に, 挿圖畫家として已に定評のある故佐久間文吾畫伯の, 凡二ヶ年半の努力の結晶であつた。畫伯は動物の生體描寫に關しては經驗も少なく, 特に鼠は初めであり, 大いに危まれたのであつたが, 試みに手がけた最初の作品が今迄の例に反し少なくとも物になつて居た事は筆者をして先づ驚喜せしめたものである。その後二ヶ年半, 技術及び速度の進歩の著しい事から, 畫伯が晩年——明治元年生——に初めてかかる方面にたつさはり, 精進の時間の極めて短かつた事は我國學術界の爲め遺憾千萬な事であつた。原畫が如何に立派な出來榮であつても印刷技術が是れに伴はなかつたならば折角の生態圖も全く豚に眞珠である理である。然し資材の不足甚だしき今日, 少なくとも原畫と比較せない限り大した不満も起らず, その上餘程の素人でない限り實物を圖版に引き較べただけで同定する事が出来る程度に漕ぎつけられた事は誠に感謝に價する事であるが, 是れは一に東京養賢堂社長及川伍三治氏の稀れに見る犠牲的努力の賜物であつたのである。記載は個體變異の觀點から全部書き變へる事が筆者の心願であつたのであるが, 多年の努力にもかかわらず中々進

捗せず, 一・二を除く外は, 單に大方針が此の線に沿ふと言ふだけで満足し, 眞の均整は他日に俟たなければならぬのが現状である。

形態學

***Rattus losea* の 2,3 の測定に於ける彷徨變異の吟味と其生物學的意味** 臺灣博物學會會報, 第 30 卷 第 200-201 號, 頁 189-201, 昭和 15 年 (1940) 6 月 1 日, 田中亮, 臺北帝大理農動物 (比較形態學哺乳動物學)

Rattus losea の矢張り同一の材料に就いてその因子的均一性の統計學的吟味を試みた。吾々は本種の變異研究に依つて成長變異の比較的大なる測定群と小なる測定群とを區別し得たが, 前者に入る尾長と頭蓋の間隙, 並に後者に入る門齒率との 3 測定の成體變異が正常曲線を示すや否やを吟味してみると, 門齒率以外は之を示すに至らない。従つて本材料は略同一生活環境の個體群であるから, この事實は尾の長さと同隙の長さに對しては成長の影響が大きい故であらうし, 門齒率を決定する因子に關しては此個體群は比較的均一の因子型より成る事を示すと云ひ得るだらう。

***Rattus losea* の毛皮形質に於ける季節的變異** Seasonal variations in the pelage characters of a Formosan wild rat, *Rattus losea* (SWINHOE). 臺北帝國大學理農學部紀要, 第 23 卷第 2 號, 頁 75-93 昭和 14 年 (1939) 11 月 20 日, 田中亮, 臺北帝大理農動物

吾々が曩に發表した本種の變異統計學的研究と同一の材料を用いて毛皮の諸形質の季節的變異を統計的に分析した。即本材料は臺北盆地産のものに限定されたので略一定の生活環境に於ける個體群なりと云へる。此の研究に依つて刺毛の發達程度, 背面下毛の平均長及び毛全體として粗硬さの諸點に於て夏毛と冬毛との間の區別を確認し得たが, 毛皮の色調には意味ある季節變異を観る事が出来なかつた。現在の材料では換毛の正確な追及は不可能であるが, その存在の證據は多かれ少かれ各季節を通じて認められるが, 特定の時期に特に著しい傾向は指摘出来ない。従つて以上の事實は本種の種的特異性によるものか又は地方的要因